HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ語から見たゲルマン語（11） ： 過去形と完了形：時制、アスペクト、話法
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 170, 1（左）-33（左）
Issue Date	2023-07-07
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.170.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90147
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_170_Shimizu.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究院紀要 170 （2023）

ドイツ語から見たゲルマン語（11）
── 過去形と完了形：時制，アスペクト，話法 ──

清　水　　誠

German as a Germanic Language（11）
—Preterite vs. Perfect: Tense, Aspect and Modality—
（*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 170.
Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.
Sapporo/Japan. 2023. ISSN 2434-9771）

SHIMIZU, Makoto
（mshimizu@let.hokudai.ac.jp）

1　完了の助動詞の省略—ドイツ語とスウェーデン語[1]

愛妻クラーラ（Clara Schumann 1819〜1896）と結ばれた「歌の年」（ド

[1] 本研究は清水（2019）（2020）（2021a）（2021b）（2021c）（2021d）（2022a）（2022b）（2022c）（2023）の続編であり，科研費の助成による（ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述，基盤研究（C）（一般），19K00540）。カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア：アイスランド語，ｱﾌ：アフリカーンス語，印欧：印欧祖語，英：英語，オ：オランダ語，ギ：（古典）ギリシャ語，ゲ：ゲルマン祖語，ゴ：ゴート語，古高ド：古高ドイツ語，古ザ：古ザクセン語，古ﾌ：古フリジア語，古ﾉ：古ノルド語，ザ：（西）低地ドイツ語北低地ザクセン方言，ﾁｭ：スイスドイツ語チューリヒ方言，中高ド：中高ドイツ語，ド：ドイツ語，西ﾌ：西フリジア語，ﾆｭ：ノルウェー語ニューノシュク，ブ：ノルウェー語ブークモール，ﾌｪ：フェーロー語，ベ：スイスドイツ語ベルン方言，ﾌｪ：フェーロー語，ラ：ラテン語，ル：ルクセンブルク語

10.14943/bfhhs.170.l1

Liederjahr 1840）を象徴するシューマンの『女の愛と生涯』（ド *Frauenliebe und -leben*）の第 1 曲は，運命の出会いを予感させる次の歌詞で始まる。

（1） ド Seit ich ihn ***gesehen***, / Glaub ich blind zu sein; / Wo ich hin nur blicke, / Seh ich ihn allein; / Wie im wachen Traume / Schwebt sein Bild mir vor, / Taucht aus tiefstem Dunkel / Heller nur empor. あの方にお会いしてから / もう何も目に入らない / どこを向いても / その姿だけが見える / 正夢のように / あの方の面影が目の前に浮かぶ / 深い闇の底から / ひたすら照り映えて浮かび上がる
（Fischer-Dieskau (ed.) 1995: 214）

あまりに受動的な女性像とも評されるシャミソー（Adelbert von Chamisso 1781～1838）の連作だが，リートとしての高い芸術性には疑う余地がない。さて，冒頭の seit ich ihn ***gesehen***「あの方にお会いしてから」は分詞構文ではない。これは，現在完了形 gesehen［***habe***］「お会いした」の完了の助動詞 habe を従属節で省略し，過去分詞 gesehen（←sehen 見る，会う）だけが残った表現である。従属節中の haben/sein の省略は中高ドイツ語後期から例証され（Lockwood 1968: 127），近代の文学作品では頻繁に見られる。

大陸北ゲルマン語の中でスウェーデン語では，書き言葉で従属節中の完了の助動詞 ha（ド haben）の現在形または過去形を省略することがある（2）（スウェーデン語の完了の助動詞は ha（古 hava）だけである）。主節での省略は古風な詩などに限られる（3）。一方，デンマーク語とノルウェー語では，この現象は見られない（Faarlund 2019: 98）。

（2） ス Han trodde att hon ***Ø glömt*** frankera brevet. 彼は（han）彼女が（hon）手紙に（brevet）切手を貼るのを（frankera）忘れた（Ø（＝hade）glömt 過去完了形，ド vergessen hatte）と（att）思った（trodde）
（Collinder 1974: 66）

（3） ス Han jorden ***Ø skänkt*** stor fröjd och frid. 大地は（han jorden）大いな

る（stor）喜び（fröjd）と（och）平和を（frid）贈り届けた（Ø（＝har）skänkt 現在完了形，ド hat geschenkt）　（Wessén 1965: 132）

スウェーデン語の完了の助動詞の省略は，「従属節の定動詞＞主節の定動詞」の順で制約が強まる。これは定動詞の語順と省略のプロセスの反映とも考えられる。つまり，スウェーデン語の定動詞はドイツ語のように，左右の枠からなる枠構造の右枠の位置が基本であり，主節の第 2 位に移動してから省略されるということである。反対の順番なら，主節での省略のほうが簡単に起こるはずである（Den Besten 1989: 68）。

従属節中の完了の助動詞の省略は，スウェーデン語では 18 世紀に急増し，同世紀半ばにピークを迎える。これには聖書の文体との関連が指摘されている（Wessén 1968[9]: 114, 122）。近代スウェーデン語の書き言葉の基礎は，『ルター聖書』（ド *Lutherbibel* 1534）の影響を受けた『グスタヴ・ヴァーサ欽定訳聖書』（ス *Gustav Vasas bibel* 1541）によって築かれた。その際，ドイツ語の影響がスウェーデン語の文章語に波及したのである。ただし，それが話し言葉にまで及ぶことはなかった。

スウェーデン語では，完了不定詞「ha＋過去分詞」でも完了の助動詞 ha を省略することもある。これはノルウェー語ブークモールでも可能である。フェーロー語でも可能だが（Thráinsson et al. 2004: 77），省略されるのは過去分詞 havt（←hava，英 have）である（(6)牽引過去分詞（attracted past participle)）。

(4)　ス Slarv med en blåslampa tros ***Ø orsakat*** branden. トーチランプの（med en blåslampa）不始末が（slarv）火災（branden）を引き起こした（Ø（＝ha）orsakat 完了不定詞，ド verursacht haben）と思われる（tros）　（Wellander 1973[4]: 139）

(5)　ブ Det kunne du ***Ø sagt*** før. それを（det）君は（du）もっと前に（før）言うことができたのに（kunne Ø（＝ha）sagt 完了不定詞，英 could have said）　（Faarlund 2019: 97）

(6) フェ Tú mátti ***Ø komið*** og ***hjálpt*** mær. 君は (tú) 私を (mær) 助けに (og hjálpt 過去分詞←hjálpa) 来る (komið 過去分詞←koma) べきだったのに (mátti Ø(＝havt) 完了の助動詞過去分詞←hava)
(Thráinsson et al. 2004: 7)

アメリカの非標準英語にも，① I ***seen*** him about three months ago. / ② I ***been*** planning it for years. という表現がある。①は過去の時点を示す three months ago があるので，meet—met, hear—heard, keep—kept などにならって過去分詞と同じ形に収束した過去形であり，アイルランド英語由来とされている。②は完了の助動詞 have を欠く表現だが，由来は黒人英語ともアイルランド英語とも言われている（朝尾 2021: 25–30）。

2　過去形と現在完了形—「論評の時制」と「語りの時制」

さて，ド seit ich ihn ***gesehen*** [***habe***] の英訳は since I ***saw*** him が自然である。ドイツ語でも過去形で seit ich ihn ***sah*** と言えるが，古びた思い出話になってしまい，高鳴る胸のときめきは伝わらない。ドイツ語の現在完了形は英語よりも使用範囲がかなり広く，ド gestern「昨日」/letztes Jahr「去年」など，過去時を明示する副詞句と共起し，完了・結果・経験以外にも広く過去の出来事を表す[2]。ただし，日常の現実世界との接点が必要で，過去形はそこから切り離された含みを伴う。この点でドイツ語の現在完了形はフランス語の複合過去（フラ je l'ai vu），過去形は書き言葉専用の単純過去（フラ je le vit）に似ている。

ドイツのロマンス語学者ヴァインリヒ（Harald Weinrich）は，『時制論—論評と語りの世界』（ド *Tempus. Besprochene und erzählte Welt* 1971[2]

[2] 現在までの継続はドイツ語では現在形で表す：ド Ich ***lerne*** seit drei Jahren Deutsch.「私は 3 年前からドイツ語を習っています」。他の西ゲルマン語もほぼ同様である（オ Ik ***leer*** sinds drie jaar Duits./ル Ech ***léiere*** säit dräi Joer Däitsch. 同上）。

（1964））において，ドイツ語の現在完了形を論評の時制（ド besprechendes Tempus），過去形を語りの時制（ド erzählendes Tempus）と捉え，ロマンス諸語や英語を含めて，テキスト言語学（text linguistics）の観点から詳細に分析した。論評の時制（現在完了形）による導入の後に，語りの時制（過去形）を用いた一連の出来事の描写が続き，最後に論評の時制（現在完了形）で全体の幕を閉じる文芸作品の形式を枠物語（ド Rahmenerzählung）と言う。その好例として，ゲーテの『若きウェルテルの悩み』（ド *Die Leiden des jungen Werthers* 1774）が挙げられる（Weinrich 1971[2] (1964): 67f., 194f.）。人妻との不倫からピストル自殺を遂げるウェルテルの悲劇的情熱を描いたこの名作は，その内面の葛藤を赤裸々に綴った多数の書簡を包み込むように，それらをまとめて出版した語り手による序文(7)と結び(8)から構成されている。1774 年の初版から一部を引用してみよう。

(7) ド Was ich von der Geschichte des armen Werthers nur ***habe auffinden können***, ***habe*** ich mit Fleiß ***gesammlet***, und ***leg*** es euch hier ***vor***, und ***weiß***, daß ihr mir's danken werdet. 哀れなウェルテルの身の上話について私が何とか探し出し得た（habe auffinden können 現在完了形）ものを入念に収集し（habe～gesammlet 現在完了形），ここに皆様にお目にかけます（leg～vor 現在形）。きっと感謝していただけるものと存じます（weiß 現在形）。

(8) ド Um zwölfe Mittags ***starb*** er. Die Gegenwart des Amtmanns und seine Anstalten ***tuschten*** einen Auflauf. Nachts gegen eilfe ***ließ*** er ihn an die Stätte ***begraben***, die er sich erwählt hatte. Der Alte ***folgte*** der Leiche und die Söhne, Albert ***vermocht***'s nicht. Man ***fürchtete*** Lottens Leben. Handwerker ***trugen*** ihn. Kein Geistlicher ***hat*** ihn ***begleitet***. 昼の 12 時に彼（ウェルテル）は亡くなりました（starb 過去形）。判事の立ち会いと手配のおかげで騒ぎは回避できました（tuschten 過去形）。夜中の 11 時頃，判事が亡骸をウェルテルが言っていた場所に埋葬させました（ließ～begraben 過去形）。

遺骸に付き添った（folgte 過去形）のは老人と息子たちでした。アルベルトは見届けられませんでした（vermocht'＝vermochte 過去形）。ロッテの命が気遣われたからです（fürchtete 過去形）。職人たちが棺を担ぎました（trugen 過去形）。聖職者は同伴しませんでした（hat～begleitet 現在完了形）。

現在時制を時制（テンス）とする現在完了形と現在形を用いて，冒頭で読者を事件の現場に誘い，その結末を過去形で語った後に，最後の 1 文を現在完了形で論評し，回想世界から現実世界に引き戻す文体的技法が読み取れる。

別の例として，ヒルデスハイマー（Wolfgang Hildesheimer 1916～1991）の短編『なぜ私はナイチンゲールに変身したか』（ド *Warum ich mich in eine Nachtigall verwandelt habe* 1952）の末尾を引用しよう（Kluge 1969: 68）。現在完了形による最後の文には，回想による物語世界での決断を日常の現実世界の視点から論評し，その正当性を改めて確認したニュアンスが認められる。

(9) ド Im September vorigen Jahres ***begab*** ich ***mich*** in mein Schlafzimmer, ***öffnete*** das Fenster weit, ***verzauberte mich*** und ***flog*** davon. Ich ***habe*** es nicht ***bereut***. 去年の 9 月，私は寝室に入り（begab mich 過去形），窓を大きく開け（öffnete 過去形），自分に魔法をかけて（verzauberte mich 過去形）飛び去った（flog 過去形）。後悔はしなかった（habe～bereut 現在完了形）。

英語ではどうだろうか。ドイツ語よりも過去形の使用領域はかなり広いが，現在完了形との使い分けには「語り」と「論評」の性格の片鱗が看取されるとヴァインリヒ（Weinrich 1971[2] (1964): 69f.）は述べている。つとにイエスペルセン（Otto Jespersen 1860～1943）は，両者の違いを次例の対比から説明しようとした。

(10) 英 Newton ***believed*** in an omnipotent God.

（Jespersen 1972（1933）: 245）

（11） 英 Newton ***has explained*** the movement of the moon. （ib. 245）

（11）で現在完了形を使うのは，地球の引力との関係で月の回転を解明したニュートンの学説が今でも有効だからで，（10）が過去形であるのは，ニュートンが神を信じていたか否かは，現在の私たちと関係がないためと説明したのである。しかし，英 New ***explained*** the movement of the moon. / Newton ***explained*** the movement of the moon in a way that is still thought to be correct. も可能であり，前者ではニュートンの説が退けられたことになる。英 Many people ***have believed*** that the the world is flat, but they were wrong. も許される。つまり，現時点での有効性ではなく，発話者の伝達意図の違いが本質的であると言えることになる（Weinrich 1971[2]（1964）: 69f.）。

3 「現実度」から見た話法としてのドイツ語の時制

ヴァインリヒは上記の両者を「時制」と呼んだ。しかし，時制（テンス tense）とは，発話時と関係づけた発話内容の直示的な時間関係を指す。①過去時制（past tense）と違って，②現在完了形（present perfect）は「テンスとしての現在時制」と「（広義の）アスペクトとしての完了」の複合なので，現在時制（present tense）の仲間である。たとえば，①は「昨日」，②は「発話時の１日前」にあたる。「複合時制」は便宜的名称にすぎない。ただし，一般にアスペクトとは，発話時とは無関係になされる発話内容の時間的特徴づけのことだが，この場合の「完了」は２つの発話内容の時間的前後関係を指す点で，通常のアスペクトとは性質を異にする（Comrie 1976: 52）。

発話時との時間的前後関係で決まる物理的な「過去（時）―現在（時）―未来（時）」と，文法範疇としての「過去時制―現在時制―未来時制」は別物である。大多数のドイツ語の教科書では，「不定詞＋wird」は未来形，「完了不定詞＋wird」は未来完了形とされている。ところが，ド Er ***wird*** wohl krank ***sein***.「彼はたぶん病気だろう」/Gestern ***wird*** er krank ***gewesen sein***.「昨日，

彼は病気だったのだろう」では矛盾する。現在時制は動詞の語彙的アスペクト，すなわち動作態様（ド Aktionsart）[3] に応じて，未来の出来事も表す（ド Morgen ***kommt*** er auch. 明日も彼は来る）。現在完了形もそうである（ド Morgen ***hat*** er die Arbeit ***beendet***. 明日には彼は仕事を終えている）。大半のゲルマン諸語と同じく，ドイツ語に未来時制（future tense）を認める根拠は薄いと言える。そこで，ドイツ語の時制は現在時制と過去時制の 2 種類とみなすのが適切である。

ゲルマン諸語の未来時の表現は，①アスペクト（ド 不定詞（＜現在分詞）＋ werden ～だろう（＜～するようになる），英 be going/about to＋不定詞）と②モダリティー（英 shall/will＋不定詞）を加えた現在形による迂言形を基本とする（詳細は Hilpert（2008）参照）。いわゆる未来形と現在形の使い分けが比較的明確な英語でも，瞬間的な出来事を表す動詞は，現在進行形で近接未来を示すことがある。アメリカの作曲家フォスター（Stephen Collins Foster 1826～1864）による『オールド・ブラック・ジョー』（*Old Black Joe* 1860）では，英 I***'m coming***, I***'m coming***, for my head is bending low; / I hear those gentle voices calling, “Old Black Joe”. のように，「（天国の仲間たちのもとに）もうすぐ行くよ」と歌っている。確定した未来の予定や運命には，現在形も使用できる。同じくアメリカの作家ポー（Edgar Allan Poe 1809～1849）の短編『黒猫』（*The Black Cat* 1843）の冒頭では，妻殺しの罪で死刑を宣告された語り手が手記に，英 But ***tomorrow I die***, and today I would unburden my soul.「しかし，私は明日死ぬのであり，今日のうちに心の重荷を解いておきたい」と記している。

時制の正体に一歩踏み込んでみよう。ドイツ語の現在時制は，現在・未来・過去の出来事や習慣・法則など広範囲に及ぶ一般的，つまり無標の時制である。過去時制はそれに色づけする特殊，つまり有標の時制と言える。その「色づけ」とは，「論評」に対する「語り」である。これは現実世界に対する話者

[3] 厳密には，動作態様は使役などヴォイス（態 voice）に関する語彙的区別も含む（ド fallen 落ちる—fällen 落とす，trinken 飲む—tränken 飲ませる，Bußmann 2008[4]: 18f.）。

の態度表明の違いであり，話法（モダリティー modality）の範疇に収まるのである。

ヴァインリヒの著書を受けてドイツ語の時制を論じた往年の論集に，『時制という概念―観点の問題か』（ド *Der Begriff Tempus. Eine Ansichtssache?* 1969）がある。とくに Kluge（1969: 68）は時制の選択を「話者の態度と姿勢の表示」（ド „ein Zeichen für die Einstellung und Haltung des Sprechenden“）として，「時制は観点の問題である」（ド „Die Tempora sind Ansichtssache.“）と断じている。これはドイツ語の時制を話法とみなす解釈である。極論すれば，直説法現在形 er kommt（←kommen 来る）は直説法 I 式（ド Indikativ I），過去形 er kam は直説法 II 式（ド Indikativ II）と改名されることになり（千石 1983: 12），「ドイツ語に時制は存在しない」という結論につながる。こう考えると，ヴァインリヒの著書のタイトルは『話法論―論評と語りの世界』としたほうが適切だったかもしれない。

ドイツ語には，動詞（不定詞 kommen 来る）の活用による話法（モダリティー）の形態的範疇，すなわちムード（法）として，直説法（indicative）の現在形 er kommt と過去形 er kam，接続法 I 式（ド Konjunktiv I）の er komme と接続法 II 式（ド Konjunktiv II）の er käme，命令形（命令法 imperative）の komm(e)!）がある。これを現実度（ド Realitätsgrad）という尺度によって位置づけてみよう。

（12）　ド　現実度　100% ←――――――――――――――――――――――――→ 0%

kommt（現実世界）　　komm(e)!　komme　käme

kam（話者の表象世界）

命令形 komm(e)!「来なさい」は現実度が発話時点 0%，発話後 100%を前提とする語形である。願望・要求を表す接続法 I 式 komme「来てほしい，来たれ」では現実度が落ち，非現実の意味が基本の接続法 II 式 käme「来ればいいのに」は現実度 0%と言える。これは，話法（モダリティー）の意味を語彙的に表す話法の助動詞の主観的用法（ド subjektiver Gebrauch, 認識様態

的モダリティー epistemic modality）の分布とも重なる。注意を要するのは，現実度 100％の語形に直説法現在形 kommt と過去形 kam が並んでいる点である。kommt は「現実世界で現実度 100％」，kam は「話者の表象世界で現実度 100％」を表す語形と捉え直すことができることになる。

4　接続法と時制の一致 ―直説法現在形・過去形から直説法 I 式・II 式へ

ここで接続法（ド Konjunktiv）に目を向けてみよう。これは主節に接続する従属節で現れるという形式に基づく名称で，「～と仮定する・願う」という意味に基づく英語の仮定法（subjunctive）に対応する。ただし，ゲルマン語の接続法（または仮定法）は願望を表す古い印欧語の希求法（optative）の実質的な継承なので，ゴート語では希求法と呼ぶのが慣例である。以下では「接続法」で統一する。

古ゲルマン諸語では，間接話法に用いる従属節の接続法と主節の直説法の時制が合致する時制の一致（sequence of tenses）を示していた。つまり，接続法は時制の性質を持っていたのである。ドイツ語でも中高ドイツ語までは，「主節：直説法現在形―従属節：接続法現在形」/「主節：直説法過去形―従属節：接続法過去形」のように，同じ時制だった（Behaghel 1928: 675–681）。

（13）　中高ド ich ***wil*** wizzen, wer ditz ***sī*** 私は（ich）これが（ditz）だれ（wer）なのか（sī 接続法現在形，ド sei）知りたい（wil wizzen 直説法現在形，ド will wissen）　（Behaghel 1928: 676 変更）

（14）　中高ド vil dicke aldā ***gevrāget wart***, wer ***wære*** der ritter āne bart 髭（ひげ）のない（āne bart）その騎士が（der ritter）だれ（wer）なのかと（wære 接続法過去形，ド wäre），何度も（vil dicke）至る所で（aldā）質問がなされた（gevrāget wart 直説法過去形，ド gefragt wurde）　（ib. 677 変更）

アイスランド語の接続法は今でも時制の一致を示し，時制の性質を保っている（15）（16）。これを失った現代ドイツ語では，主節の動詞が現在形か過去形かとは無関係に，従属節の接続法はⅠ式が原則である（17）（18）。（14）の訳も，ド … wer ***sei*** der Ritter ohne Bart となる[4]。なお，（19）の古ノルド語では，過去の文脈で主節の動詞が歴史的現在（historical present）になっても，従属節の動詞は接続法過去形である。

（15）　ア Hún ***segir*** að hann {***komi*** bráðum/***sé*** þegar ***kominn***}. 彼女は（hún）彼が（hann）{もうすぐ（bráðum）来る（komi 接続法現在形←koma）/もう（þegar）来た（sé～kominn 接続法現在完了形} と言っている（segir 直説法現在形←segja）

（16）　ア Hún ***sagði*** að hann {***kæmi*** bráðum/***væri*** þegar ***kominn***}. 彼女は彼が {もうすぐ来る（kæmi 接続法過去形）/もう来た（væri～kominn 接続法過去完了形} と言った（sagði 直説法過去形）

（17）　ド Sie ***sagt***, er {***komme*** bald/***sei*** schon ***gekommen***}. 彼女は彼が {もうすぐ来る（komme 接続法Ⅰ式←kommen）/もう来た（sei～gekommen 接続法Ⅰ式完了形} と言っている（sagt 直説法現在形←sagen）

（18）　ド Sie ***sagte***, er {***komme*** bald/***sei*** schon ***gekommen***}. 彼女は彼が {もうすぐ来る（komme 接続法Ⅰ式/もう来た（sei～gekommen 接続法Ⅰ式完了形} と言った（sagte 直説法過去形）

（19）　古ノ Hann ***tók*** honum vel ok ***spyrr***, hverr hann ***væri***. 彼は（hann）彼を（honum）迎え（tók 直説法過去形 vel←taka），そして（ok）彼が（hann）だれ（hverr）であるかと（væri 接続法過去形←vera）たずねた（＝たずねる，spyrr 歴史的現在←spyrja）

（*Gunnlaugs saga ormstungu* Chap. 9）

古ゲルマン諸語における「接続法現在/過去」（ド Konjunktiv Präsens/

[4] ドイツ語でも直説法と同形の場合などでは，接続法Ⅱ式を用いることがある。

Präteritum）を現代ドイツ語で「接続法 I 式/II 式」と呼ぶのは，時制の性質を失ったためである。「現実度」(12)のスケールに並んだドイツ語の直説法現在形/過去形も，時制から話法に移行したとみなして「直説法 I 式/II 式」と改名できるのである。

ただし，現代ドイツ語の直説法現在完了形（ド ich habe ihn gesehen）と過去形（ド ich sah ihn）は，完全に時制（テンス）から話法（モダリティー)―正確には法（ムード)―に変質したとは言い切れない。両者の区別は，フランス語の複合過去（フラ je l'ai vu）と単純過去（フラ je le vit）ほど鮮明ではない。なぜなら，話法の助動詞の現在完了形は不定詞との連続で煩雑と意識されるからである。また，完了の助動詞との重複を避けたい haben/sein でも過去形が好まれる。さらに，過去形は許されるが，現在完了形は不可の場合もある。次の比喩的な状態表現や助動詞表現がその例である。これを現在完了形にすると，(20) ist～gegangen「行った」(←gehen)，(21) hat～geschwommen「泳 い だ」(←schwimmen)，(22) hat～versprochen「約 束 し た」(←versprechen)，(23) hat～geschienen「輝いた」(←scheinen）という文字通りの意味になってしまう。

(20) ド Das Wohnzimmer meiner Tante ***ging*** zur Straße. 私の叔母(おば)の居間は通りに面していた ((18)～(21) Latzel 1977: 76f.)
(21) ド Das Mädchen ***schwamm*** in Tränen. 女の子は涙に暮れた
(22) ド Das Wetter ***versprach*** schön zu werden. 天気は良くなりそうだった
(23) ド Der Mann ***schien*** betrunken zu sein. 男は酔っているようだった

5 時制なしの過去の表現―過去形の消失と二重完了形

それにしても，時制（テンス）がなくても支障はないのだろうか。もちろん，それは杞憂である。現在完了形で 2 つの出来事の時間的前後関係を示せば，時制の役割である発話時との関係の表示は語用論的要因で決まるからで

ある。発話内容は，発話時である現在時に関係づけられるのが普通である。「火事！」と叫んだ話者は，たいてい眼前の状況を指している。それと同じく，①ド er ***kommt***「彼は来る」は発話時と同時，②ド er ***ist gekommen***「彼は来た」はそれ以前と解釈されて，それぞれ現在と過去の出来事を表すのが自然である。①を過去時に結びつければ，歴史的現在になり，動詞の語彙的アスペクトに応じた変化の意味や推量など話者の主観が加われば，①②ともに未来時の表現になる。日常の現実世界の出来事を述べる場合には，不定詞（ド kommen↔gekommen sein）に話法（＝屈折範疇では法（ムード））を加えて，直説法 I 式（ド er kommt↔er ist gekommen）にすれば，あとは語用論的要因で発話状況に結びつくので，時制なしでも困らないのである。

ドイツ語では，古高ドイツ語後期から中高ドイツ語期に現在完了形が発達し，16 世紀に完全に文法化した（Ebert 1978: 59）。「過去形↔現在完了形」の割合は，「1350～1400 年（61%↔39%）＞1650～1700 年（25%↔75%）」と推移している。過去形の消失（ド Präteritumschwund）はマイン川（ド Main）以南で激しく，以前はその原因として，13 世紀以降，上部ドイツ語から広がった語末音 -e [ə] の脱落の結果，弱変化動詞 3 人称単数で現在形と過去形の区別が不明確になった点が重視されていた（ド「現在形 er mach***t***～過去形 er macht-***Ø***」<「er mach***t***↔er mach***te*** (←machen 作る)」）。しかし，現在完了形の増加は，母音交替で時制を区別した強変化動詞でも早期に観察される。今では，上記の「論評」で述べた発話内容との関連，文法形式を 1 語よりも 2 語で表現する分析的傾向，枠構造の発達など，複数の要因が想定されている（Fleischer/Schallert 2011: 129–133, Szczepaniak 2011[2]: 137）。

過去形の消失はイディッシュ語，ペンシルヴェニアドイツ語を含めて，中部と南部の西ゲルマン語で顕著である。西中部ドイツ語方言から生まれたルクセンブルク語では，話法の助動詞と sinn/hunn（ド sein/haben），語幹母音がおもに ou/u となる動詞（ル g***ou***f←ginn 与える・～になる，kr***u***t←kréien 得る）を合わせた約 40 語に残るだけで，実際の使用も稀である（Schanen/Zimmer 2012: 40, 327–332）。上部ドイツ語では，最南部のヴァリス（ド Wallis）とチロルの方言を除いて，周囲の非ゲルマン諸語と同じく全面的に

過去形が消失しており（König 1998[12]: 159, 162），過去の表現はもっぱら完了形に頼っている。

この場合，基準となる過去時点以前の出来事「すでに～していた」は，どう表現するのだろうか。まず，ルクセンブルク語は sinn/hunn（ド sein/haben）の過去形（ル hat/wor, ド hatte/war）が残ったので，これに過去分詞を加えた過去完了形を使う。これは標準ドイツ語と同じである。

(24) ル Wéi ech Kaffi ***gedronk hat***, ***sinn*** ech spadséiere ***gaangen***. 私は（ech）コーヒーを（Kaffi）飲む（gedronk hat 過去完了形←drénken, ド getrunken hatte）と（wéi），散歩に出かけた（sinn ech spadséiere gaangen 現在完了形←goen, ド bin ich spazieren gegangen） （Braun et al. 2005: 21）

上部ドイツ語に属するスイスドイツ語チューリヒ方言とベルン方言では，（いわゆる）現在完了形が過去完了形も兼担する。ただし，前後関係を明示する場合には，標準ドイツ語の完了不定詞「過去分詞＋ド gehabt/gewesen」に完了の助動詞の現在形ド（er）hat/ist にあたる語形を添えた二重完了形（Doppelperfekt, Eroms 2009）を編み出した(25)～(27)。ベルン方言では，発話時に有効性が失われたか，はるか以前の出来事にも使う(28)。

(25) 二重完了形
チュ er hät/isch（ド er hat/ist））～過去分詞＋ghaa/gsii（ド gehabt/gewesen）
ベ är het/isch～過去分詞＋gha/gsy（同上）

(26) チュ Grad wo t ***abgfaare gsii bisch***, isch de psuech choo. ちょうど（grad）君が（t）出発した（abgfaare gsii bisch 二重完了形←abfaare）後で（wo）訪問客が（de psuech）来た（isch～choo 現在完了形←choo） （Baur 1997[11]: 107）

(27) ベ Es ***isch*** es Läbe ***gsy***, wi me's no nie ***het gseh gha***. それは（es）人が

（me）まだ一度も（no nie）見たことがなかった（het gseh gha 二重完了形←gseh）ような（wi～'s, ド wie～es）生涯（Läbe）だった（isch～gsy←sy（いわゆる）現在完了形）（Hodler 1969: 494 変更）

（28） ベ Werum ***hesch***'s eigetlech nid ***gmerkt gha***? いったい（eigetlech）なぜ（werum）君は（Ø）それに（'s, ド es）気がつかなかったんだ（hesch～nid gmerkt gha 二重完了形←merke）

（Marti 1985: 170）

二重完了形はイディッシュ語やペンシルヴェニアドイツ語にも存在する（イ er ***hot geshribn***↔er ***hot gehat geshribn***, ペ er ***hot gschriwwe***↔er ***hot gschriwwe ghatt/ghadde***）。ドイツ語，英語と比較されたい（ド er ***hat geschrieben***↔er ***hatte geschrieben***, 英 he ***has written***↔he ***had written***）。

さらに特筆に値するのは，極度に形態を簡素化したアフリカーンス語である。不定詞は語幹のみ（-n で終わる 1 音節語を含む，例：sien 見る，doen する），過去形はほぼ失われ，過去分詞は「ge-語幹（無変化）」で，弱変化動詞の歯音接尾辞も強変化動詞の母音交替もない(29)。過去形の残存は話法の助動詞（過去分詞なし），ｱﾌ dag/dog（←dink 考える），wis（←weet 知っている），was（←wees, ド sein/英 be），had（←hê, ド haben/英 have）に限られる。しかも，過去時を示す語（ｱﾌ toe そのとき；～したとき）があれば，過去の出来事には人称変化しない（いわゆる）現在形（非完了形）が普通である。過去時を明示するには，（いわゆる現在）完了形「過去分詞＋het（ド haben/英 have の現在形に相当）」を用い，過去完了形もこれで十分である(30)。主節が完了形ならば，従属節では過去の出来事にも（いわゆる）現在形（非完了形）が原則である（31）(32)（Ponelis 1979: 271）。

（29）		不定詞(強変化/弱変化)	現在形(ｱﾌ 非完了形)	過去形	過去分詞
	ｱﾌ	kom 来る/voel 感じる	hy kom/voel(無変化)	Ø/Ø	gekom/gevoel
	ド	kommen/fühlen	er kommt/fühlt(人称変化)	kam/fühlte	gekommen/gefühlt

（30） ｱﾌ Toe hy tuis ***kom***, ***sien*** hy dat sy vrou die hele dag niks ***gedoen het***

nie. 彼は（hy）家に（thuis）帰った（hy kom 現在形(非完了形)）とき（toe），妻が（sy vrou）一日中（die hele dag）何も（niks～nie 否定枠）していなかった（gedoen het（現在)完了形←doen）のを（dat）見た（sien 現在形(非完了形)）　（Donaldson 1993: 228）

(31)　ｱﾌ Hy ***het gevra*** of ons siek ***voel***. 彼は(hy)私たちが(ons)病気(siek)と感じる（voel 現在形(非完了形)）かと（of）たずねた（het gevra（現在)完了形←vra）　（ib. 231）

(32)　ｱﾌ Toe die skoot ***klap***, ***het*** hy net 'n oomblik ***gehuiwer***. 銃声が（die skoot）響いた（klap 現在形(非完了形)）とき（toe），彼は（hy）一時も（nie 'n oomblik）ひるまなかった（het～gehuiwer（現在)完了形←huiwer）　（Ponelis 1979: 265）

6　弱変化動詞過去形の歯音接尾辞の欠如 ―西フリジア語，フェーロー語，低地ドイツ語

過去形の消失の波は，過去時制が健在な言語にも押し寄せている。弱変化動詞が過去形，それに過去分詞でも歯音接尾辞を失った言語が見られるのである。英語の put—put—put, set—set—set など散発的な例だけでなく，組織的な欠如を示すケースで，西フリジア語（Meijering 1980），フェーロー語，ニューノシュク（Werner 1993），低地ドイツ語北低地ザクセン方言が該当する。

まず，西フリジア語から始めよう。古フリジア語以来，弱変化動詞は e-動詞（西ﾌ diel***e*** 分ける＜古ﾌ del***e***）と je-動詞（西ﾌ meits***je*** 作る＜古ﾌ mak***ia***）に簡素化している（Bremmer 2009: 78–80）。前者の e-動詞（西ﾌ ik diel 現在形—ik diel***d***e 過去形—diel***d*** 過去分詞）に対して，後者の je-動詞は歯音接尾辞を失っている。後者の je-動詞はまた，時制と人称変化に応じて -tsje [tʃə]（西ﾌ mei***tsje***）↔-ke [kə]（西ﾌ ma***kke-***）という口蓋化の有無を示す。

(33)　西ﾌ 不定詞 meitsje 作る—過去分詞 makke ＜古ﾌ makia—(e)maka***d***/-e***d***

単数：	1 人称	2 人称	3 人称	複数：1/2/3 人称
現在	ik meitsje	(do)makkest	hy makket	{wy/jimme/hja} meitsje
＜古フ	ik makie	thu makast/-est	hi makat(h)/-et(h)	{wi/ji/hia} makiat(h)/-et(h)
過去	ik makke	(do)makkest	hy makke	{wy/jimme/hja} makken
＜古フ	ik maka***d***e	thu maka***d***est	hi maka***d***e	{wi/ji/hia} maka***d***en

後者の -ke で終わる過去形（西フ ma***kke***/ma***kkest***/ma***kken***）に注意されたい。歯音接尾辞 -d が脱落して過去形の目印がなくなり，２人称単数（do）ma***kkest*** は現在形か過去形か不明である。３人称単数では，現在形 hy ma***kket*** のほうがゼロ語尾の過去形 hy ma***kke-Ø*** よりも形態的に有標と言える。je-動詞は e-動詞よりも少数派だが，外来語に用いる earje-動詞（ドieren-動詞/オ eren-動詞）を含み，生産的なグループなので，影響は少なくない（西フ studear***je*** 大学で学ぶ—過去形 studearr***e***—過去分詞 studearr***e***↔ド studier***en***—studier***te***—studier***t***/オ studer***en***—studeer***de***—gestudeer***d***）。

次はフェーロー語である。以前の jan-動詞（フェ telja 数える—過去形 tal-***d***i—過去分詞 talt）と ēn-動詞（フェ hava 持っている—過去形 hev***ð***i/(古) hav***d***i—過去分詞 hav***t***）では，歯音接尾辞 -d-/-t- が保たれている。問題は過去形が「語幹＋-að/uð-」となる多数派で，その大部分は，ゲルマン祖語の弱変化動詞の１つに数えられる ōn-動詞の後裔にあたる。

(34) フェ 不定詞 kalla ['kʰaḍla] 呼ぶ—過去分詞 kalla***ð*** ['kʰaḍla]
＜古ノ kalla—kalla***ð***r /ð/(男性単数主格)

		1 人称	2/3 人称	1/2/3 人称
現在	単数：eg kalli	{tú/hann} kallar	複数：{vit/tit/teir} kalla	
	＜古ノ ek kalla	{þú/hann} kallar	vér kǫllum (þ)ér kallið þeir kalla	
過去	単数：{eg/tú/hann} kalla***ð***i ['kʰaḍlajɪ]		複数：{vit/tit/teir} kalla***ð***u ['kʰaḍlavʊ]	

		1 人称	2 人称	3 人称
＜古ノ	単数：ek kalla***ð***a /ð/	þú kalla***ð***ir /ð/	hann kalla***ð***i /ð/	
	複数：vér kǫllu***ð***um /ð/	(þ)ér kǫllu***ð***uð /ð/	þeir kǫllu***ð***u /ð/	

ﾌｪ kalla [ˈkʰaḍla]—過去形 kalla***ð*** [ˈkʰaḍlajɪ]/kalla***ð***u [ˈkʰaḍlavʊ]—過去分詞 kalla***ð*** [ˈkʰaḍla] の文字 ð は，19 世紀のハンメシュハイム（Venceslaus Ulricus Hammershaimb 1819〜1909）の正書法による古ノルド語を模範とした人為的なつづりで，けっして発音しない。フェーロー語では，[ð] の発音が失われ，ð の文字だけが残されたのである。歯音接尾辞は消滅しており，ﾌｪ -a***ð***i [ajɪ]/-a***ð***u [avʊ] の [j]/[v] は母音連続 [aɪ]/[aʊ] を回避して挿入したわたり音（glide）である。したがって，現在形（ﾌｪ kalli [ˈkʰaḍlɪ]/kalla [ˈkʰaḍla]）と過去形（ﾌｪ kalla***ð***i [ˈkʰaḍlajɪ]/kalla***ð***u [ˈkʰaḍlavʊ]）はわたり音と母音で区別される。これと同様に，過去分詞 kalla***ð*** [ˈkʰaḍla] は不定詞 kalla [ˈkʰaḍla] と同じ発音である。

ノルウェー語ニューノシュクも，かつての jan-動詞（ﾆｭ telja 数える—tal***d***e—tal***t***）と ēn-動詞（ﾆｭ ha 持っている—ha***dd***e—ha***tt***）は歯音接尾辞を保持している。しかし，ōn-動詞の後裔を中心に多数派となったグループは，「不定詞—過去形—過去分詞」が同形で母音 -a で終わる。ここでも過去形 kasta よりも，-r で終わる現在形 kasta***r*** のほうが形態的に有標である。ブークモールにも，過去形と過去分詞に kaste***t*** と並んで kast***a*** がある。これはデンマーク語の kaste—kaste***de*** [ðə]—kaste***t*** [ð] から距離を置く革新的なブークモールの異形態である。方言差が激しく，言語規範が緩やかなノルウェー語らしいと言えよう。

(35)　ﾆｭ 不定詞 kasta 投げる—現在 kastar—過去 kasta—過去分詞 kasta
(36)　ブ 不定詞 kaste—現在 kaster—過去 kaste***t***/kasta—過去分詞 kaste***t***/kasta

低地ドイツ語北低地ザクセン方言でも，新低地ドイツ語期（1600〜）に母音間の d と語末音 -e [ə] が脱落し（Stellmacher 1983: 266），徐々に過去形（-de）で歯音接尾辞が消失した。過去分詞の古ザ gi- も口蓋化を経て失われた。したがって，1/2 人称単数は現在形と過去形が同形である（ザ ik tell/du tellst）。3 人称単数では，現在形 tell***t*** が過去形 tell よりも形態的に有標であ

る。フェーロー語以外では，「現在形：無標」↔「過去形：有標」という通常の目安とは逆に，現在形のほうが有標性が高いのである。

(37)　ザ 不定詞 tellen 数える—過去分詞 tellt ＜古ザ tellian—gitald

現在	単数：ik tell	du tellst	he tellt	複数：{wi/ji/se} tellt	
	＜古ザ ik telliu	thŭ telis	hĕ telid/-it/-iđ	{wĭ/gĭ/sia} teliad/-eat/-iađ	
過去	単数：ik tell	du tellst	he tell	{wi/ji/se} tellen	
	＜古ザ ik talda/-e	thŭ taldes/-os/-as	hĕ talda/-e	{wĭ/gĭ/sia} taldun/-on	

7　ゲルマン諸語の過去形の起源—アスペクトと時制の間

上述のように，ドイツ語などで過去の出来事の表現が過去形から現在完了形にシフトしたのは，時制（テンス）から（広義の）アスペクト（相）への転換と言える。ところが，じつは逆に，ゲルマン祖語以来の時制としての過去形は，印欧祖語のアスペクト範疇からの発達だった。「歴史は繰り返す」と言うが，言語史には「復活する」こともあると言える。詳細は次のとおりである。

ゲルマン祖語で誕生した弱変化動詞は，次第に勢いを増し，歯音接尾辞の付加で語幹が固定して，強変化動詞の母音交替は片隅に追いやられた。そもそも古い印欧語では，動詞の母音交替は完了（perfect）[5] とアオリスト（aorist）というアスペクトの対立を示していたが，ゲルマン語はこれを時制としての過去形に変質させたのである。印欧語の完了は過去の出来事の結果として生じた現在の状態を表し，アオリストは出来事全体を時間的経過とは無関係に捉える活用形だった。両者はそれぞれ「継続的状態」と「瞬間的出来事」という出来事自体の時間的構造を表すアスペクト範疇だが，直説法以外では過去の意味と無縁のアオリストも，直説法では過去時と相性が良く，頻繁に過去の出来事を表した。同じく印欧語の完了も，出来事の生起が現在時の状態

[5] ゲルマン諸語の完了形（完了の助動詞＋過去分詞）から区別して，下線をつけて示す。

に先行する点で，過去の意味を併せ持っていたのである。

たとえば，過去現在動詞のド wissen「知っている」の現在形 ich weiß「私は知っている」は，ラ videō「私は見る」の完了形 vīdī「私は見た」に対応し，「見た結果，知っている」が原義だった。紀元前 47 年のゼラ（現在はトルコ領）の戦いで勝利したローマ軍指揮官カエサルがローマに送った手紙の名セリフとして知られるラ vēni, ***vīdī***, vīcī「来た，見た，勝った」は，veniō, ***videō***, vincō「（私は）来る，見る，勝つ」の完了形である。ドイツ語訳（ich kam, ich sah, ich siegte）と英訳（I came, I saw, I conquered）は，過去形になっている。ちなみに，プルタルコスの『英雄伝』に記された古典ギリシャ語訳（ラテン語原典不明）は，êlthon, eídon, eníkēsa（ἦλθον, εἶδον, ἐνίκησα）である。これは「話者自身の現在から見て一応片づいたと考えられることについてもひろく用いられる」（高津 1968: 143）という用法のアオリストによる。

そこで，ゲルマン祖語は両者の二次的意味だった過去時を中心に据えて，過去形にまとめ，現在形とのペアによる時制組織に転換したのである。印欧祖語の o-階梯による完了は，ゲルマン祖語では a-階梯（ゲ *a＜印欧 *o）による過去単数になり，ゼロ階梯（_）によるアオリストは過去複数に転身した。強 Ia（＝強変化動詞第 I 系列）：ゴ beita/古高ド bīzu「私は噛む」に対応する母音交替を示す leípō（λείπω）「私は残す」を例に取って，過去形 1 人称単数・複数を比較してみよう。完了のギ lé-(λέ-) は重複接頭辞，アオリストのギ é-(ĕ-) は過去時を示す加音（augment）である。

(38) 印欧 e-階梯：現在形（ギ l***e***íp-ō（λ***ει***π-ω）＜印欧 ***e*** + ĭ）
＞ゲ e-階梯：現在形（ゴ b***ei***t-a (ei /i:/)/古高ド b***ī***z-u ＜ゲ ***e*** + ĭ）

(39) ① 印欧 o-階梯：完了（ギ lé-l***o***ip-a（λέ-λ***οι***π-α）＜印欧 ***o*** + ĭ）
＞ゲ a-階梯：過去単数（ゴ b***ai***t (ai /ɛ:/)/古高ド b***ei***z ＜ゲ ***a*** + ĭ）
② 印欧 ゼロ階梯(_)：アオリスト（ギ é-l_ip-on（ĕ-λ_ιπ-ον）＜印欧 ***ゼロ*** + ĭ）
＞ゲ ゼロ階梯(_)：過去複数（ゴ b_it-um/古高ド b_it-um ＜ゲ ***ゼロ*** + i））

古典ギリシャ語のアスペクトの対立（完了：***o***＋i↔アオリスト：ゼロ（_）＋i）は，古い印欧語の継承である。かたやゴート語と古高ドイツ語では，数（すう）の対立（過去単数：***a***（＜印欧 *****o***）＋i）↔複数：ゼロ（_）＋i）に姿を変えている。これは文法形式が想定外の別の役割を担うに至る外適応（exaptation）の一例である（Lass 1990: 83–87）。その後，現代ゲルマン諸語では，アイスランド語やフェーロー語などを除いて，数の対立も類推によって単複のどちらかに統一された（ア/ファ 不定詞 b***í***ta—現 3 単 b***í***tur—[過 1 単 b***ei***t↔過 1 複 アb***i***tum/ファ b***i***tu]）

8　完了形と完了の助動詞の選択

8-1　ゲルマン諸語の完了形の成立

前節において，古い印欧語の完了は「過去の出来事の結果として現在の状態」を表したと述べた。これは，ゲルマン諸語の現在完了形（完了の助動詞＋過去分詞）の初期の意味と似ている。古くは，ド Er ***hat*** ein Haus ***gebaut***.「彼は家を建てた」は Er hat ein gebautes Haus.「彼は建てられた家を持っている」/「家を建てられたものとして持っている」の意味だった。過去分詞 gebaut（←bauen 建てる）は受動の意味で，目的語 ein Haus「家」を修飾し，形容詞語尾（-es）を伴っていたのである。その後，ein Haus「家」と hat「持っている」との関係が薄れて，hat～gebaut「建てた」となり，現在の状態から過去の出来事の意味にシフトした。英語でも同様で，たとえば，英 ***Have*** your homework ***done*** before he comes.「彼が来る前に宿題をやってしまいなさい（＝宿題をなされた状態で持っていなさい）」には，状態の意味が残っている。その残存の度合いは，完了形が現在時との「縁」を保っている英語から，「疎遠」になったドイツ語やオランダ語，過去形を捨てて「絶縁」したルクセンブルク語，スイスドイツ語，イディッシュ語，ペンシルヴェニアドイツ語，アフリカーンス語まで，5. で述べたとおりである。

ゲルマン諸語の代表的な完了の助動詞には，ド haben（英 have）のほかに，ド sein（英 be）がある。ド Er ***ist gekommen***.「彼は来た」は，古くは

Er ist Gekommener.「彼は来た者だ」の意味を表し，過去分詞 gekommen は形容詞の名詞化で，語尾（-er）を伴っていた。英 You ***are welcome***/ド Sie ***sind willkommen***.「ようこそ＜あなたは望まれて来た客（古英 wilcuma/古高ド willicomo）です」を連想されたい。英語でも「be-＋自動詞過去分詞」による be-完了形（*be*-perfect）は 18 世紀初めまで好まれ，現在でも各地の方言に残っている（Siemund 2013: 120）。英 ***Gone are*** the days when my heart was young and gay（*Old Black Joe*）など以外に，英 ***Are*** you ***finished***?「もうおすみですか」のように，フランス語からの借用語にも使うことから，ケルト語派のアイルランド語の影響を受けたアイルランド英語由来とも言われている。アイルランド英語には，ほかにも個性的な完了形の諸形式が存在する（Filppula 1999: 90–129, 朝尾 2021: 38）。

そこで，本来，ドイツ語の完了の助動詞 haben は対格目的語を伴う他動詞と使う，つまり，他動詞を支配するはずである。したがって，ド Er ***hat geschlafen***.「彼は眠った」（←schlafen 眠る）は本来，奇妙であり，これは haben-支配（ド *haben*-Rektion）が領域を広げた結果とみなされている。状態の変化の意味が不明確な schlafen「眠る」のような自動詞（非能格動詞，ただし動作主性（agentivity）は低い）に古くは過去分詞がなかったのは，スウェーデン語の対応語 sova「眠る」にスピーヌム（supinum）の sovit はあるが，過去分詞は存在しない事実を想起させる。ゴート語にも状態を表す自動詞に過去分詞はなく，「ゴ haban（ド haben）＋過去分詞」による完了形も欠けていた。一方，sein-支配（ド *sein*-Rektion）は，古くから場所・状態の変化の意味が明確な kommen「来る」，sterben「死ぬ」，welken「枯れる」などの自動詞（非対格動詞）に限られていた。haben-支配だけになった英語，アフリカーンス語，スウェーデン語，ノルウェー語ブークモールとニューノシュクは，haben の対応語の侵入が sein-支配の動詞にも及んだ例である。一方，大陸北ゲルマン語のデンマーク語をはじめ，その他の現代ゲルマン語の多くは haben-支配と sein-支配を保っている。

8–2　アイスランド語の 3 つの迂言形

―hafa＋過去分詞，vera＋過去分詞，vera búinn að-不定詞

ところが，アイスランド語では，koma「来る」，fara「行く」，ganga「行く，歩く」などの運動を表す自動詞は，hafa（ド haben）-支配と vera（ド sein）-支配がともに可能である。ただし，両者の意味は異なっており，hafa-支配は過去の事実（40），vera-支配は結果として生じた状態（41）を表す。後者は以前の状態表現の継承，前者は過去の出来事の意味を強めた完了形の発達を具現している。

（40）　ア ¦Hann ***hefur*** oft ***komið***/Þeir ***hafa*** oft ***komið***¦ til Reykjavíkur. 彼（hann）/彼らは（þeir）しばしば（oft）レイキャヴィークに（til Reykjavíkur）来た（hefur/hafa komið←hafa, koma 来る，発話時に不在の可能性あり）

（41）　ア ¦Hann ***er kominn***/Þeir ***eru komnir***¦ til Reykjavíkur. 彼/彼らはレイキャヴィークに来ている（er kominn/eru komnir←vera, 発話時に滞在中）

（40）の過去分詞は中性単数（komið←koma 来る）で不変化であるのに対して，（41）の過去分詞は形容詞と同じく主語の性・数に一致して強変化する（男性単数主格 kominn/複数 komnir）。上記のス sova「眠る」に関連して述べたスウェーデン語のスピーヌムと過去分詞は，両者を峻別した 18 世紀の規範化である。なお，（40）ア Hann er kominn. は副詞 ný「今」と複合して，ア Hann er ***nýkominn***.「彼はたった今，来てそこにいる」とも言えるので，かなり形容詞に近いと言える（*nýkoma という動詞は存在しない）。

それでも，アイスランド語の hefur komið はドイツ語やオランダ語と異なり，英語に似て，現在時との関連を保っている。次例の（42）現在完了形 hef verið（英 has been）は，まだ病気であることも含意するが，（43）過去形 var（英 was）は，発話時の健康状態とは無関係の過去の事実の描写である。

(42) ア Ég ***hef verið*** veikur í þrjá mánuði. 私は（ég）3 か月間（í þrjá mánuði）病気（veikur）だった（現在完了形 hef verið, 英 have been）

(43) ア Ég ***var*** veikur í þrjá mánuði. 同上（(41)との意味の差は上記のとおり）（過去形 var, 英 was）

ただし，アイスランド語の現在完了形は「昨日，1 年前」などの過去の時点を表す副詞成分とは相容れない。これはデンマーク語をはじめ，他の北ゲルマン語でも同様である。

さらに，アイスランド語は「vera búinn að＋不定詞」（〜したばかりだ）という近接過去とも言うべき完了形を頻用する。この búinn は「準備した」の意味で，búast「準備する」の過去分詞である。そこで，hann er ***búinn***（-nn＜-n＋r）のように，形容詞と同じく主語の性・数と一致して強変化する。ドイツ語の「(damit) fertig sein zu-不定詞」（〜し終えている）と似た表現と言えよう。

(44) ア Hann ***er búinn að skrifa*** bréfið. 彼は（hann）手紙を（bréfið）ちょうど書いたばかりだ（er búinn（男性単数主格）að skrifa）

(45) ア Hann ***hefur skrifað*** bréfið. 彼は手紙を書いた（hefur skrifað ←skrifa）

過去形 skrifaði「書いた」と違って，2 例とも現在時との関連を含意するが，(44)hefur skrifað よりも(45)er búinn að skrifa のほうが「たった今，書き終えて，目の前に書いた手紙がある」という結果としての状態の意味が強い。ただし，「vera búinn að＋不定詞」は「hafa＋過去分詞」よりも使用制限が強く，瞬間的出来事（ア deyja 死ぬ）や状態（ア standa 立っている）の意味の動詞とはあまり愛称がよくない（Neijmann 2022: 76–78）。

さらに，「vera búinn að＋不定詞」は hafa-支配の完了形にもできる。vera（ド sein/英 be）を verða（ド werden/英 become）で置き換えれば，未来の意味の「verða búinn að＋不定詞」（〜してしまっているだろう）にもなる。

（46） ア Ég ***er/var*** búinn að gleyma.（ド Ich ***habe/hatte*** schon vergessen.）
私は（ég）忘れて（gleyma）しまった/しまっていた（er/var, 英 am/was）（Kress 1982: 154f.）

（47） ア Ég ***hef/hafði*** verið búinn að gleyma.（ド Ich ***habe/hatte*** schon vergessen（gehabt））私は忘れてしまっていた/（その時すでに）忘れてしまっていた（hef/hafði verið, 英 have/had been）（ib. 155）

（48） ア Ég ***verð*** búinn að gleyma.（ド Ich ***werde*** schon vergessen haben.）
私は忘れてしまっているだろう（verð, ド werde/英 become）（ib. 155）

旧東ドイツ出身のアイスランド語学者 B. クレス（Bruno Kress 1907〜1997）は，名著『アイスランド語文法』（ド *Isländische Grammatik* 1982）の中で，「vera＋過去分詞」と「vera búinn að＋不定詞」を結果状態構文（ド resultativ-situative Konstruktionen）として，完了形「hafa＋過去分詞」から区別している（Kress 1982: 152–156）。前者の 2 つの構文には，運動動詞のほかに sofna「寝入る」，ske「起こる」，breytast「変わる」など状態の変化を表す自動詞も含まれる。

ほかにも，始動アスペクトを表す「fara að＋不定詞」（〜し始める）も頻繁に用いる。進行形「vera að＋不定詞」（〜しているところだ）を含めて，アイスランド語では，英 at と同源の不定詞標識 að を用いた「að＋不定詞」による多彩な迂言形が発達している。ここに，屈折語尾を豊富に残すアイスランド語の別の側面が見られる。

8–3　ドイツ語とオランダ語の完了の助動詞―場所の移動と状態の変化

アイスランド語の（39）hann hefur komið「彼は来た」（出来事）と（40）hann er kominn「彼は来ている」（状態）は，hafa-支配と vera-支配という完了の助動詞による文法的アスペクト（grammatical aspect）の区別である。一方，対応するドイツ語の haben-支配と sein-支配は動詞ごとに決まっており，ともに過去の出来事を表す点で，動詞自体の語彙的アスペクト（lexical aspect）[6]

を反映した同一の完了形の形式と言える。まとめると，haben-支配は対格目的語を伴う他動詞（ド bauen 建てる）と場所・状態の変化が不明確な自動詞（非能格動詞：ド schlafen 眠る），sein-支配は場所・状態の変化が明確な自動詞（非対格動詞：ド kommen 来る，wachsen 育つ）として棲み分けている。

アイスランド語の koma/ganga/fara と違って，ドイツ語の kommen「来る」/gehen「行く」/fahren「（乗り物で）行く」はもっぱら sein-支配である。これに対して，ドイツ語には，運動の様態の意味が明確な schwimmen「泳ぐ」/fliegen「飛ぶ」/laufen「歩く，走る」/rudern「漕ぐ」/dansen「踊る」など，haben-支配と sein-支配がともに可能な例もある。場所の移動を表すときには sein-支配，それ以外は haben-支配である。ともに過去の出来事｛〜した｝の意味には変わりがない。

(49) ド ① Er ***ist*** ans andere Ufer ***geschwommen***. 彼は対岸まで泳いだ
② Er ***hat*** zwei Stunden ***geschwommen***. 彼は 2 時間泳いだ

(50) ド ① Sie ***ist*** nach Rom ***geflogen***. 彼女はローマに飛んだ
② ***Hast*** du schon mal in einem Hubschrauber ***geflogen***? 君はヘリコプターに乗ったことはあるかい

この差は，ド ans andere Ufer schwimmen「対岸まで泳ぐ」↔zwei Stunden schwimmen「2 時間泳ぐ」のように，動詞句で顕在化している。語彙的アスペクトの決定は動詞を超えて，動詞句のレベルに持ち越されるのである。

現代ドイツ語では，一般に場所の移動を表す自動詞は sein-支配が優勢な傾向が強い。(49)②と(50)②は ist〜geschwommen/geflogen とも言い，reisen「旅行する」は今では sein-支配のみになっている（Paul 2002[10]: 793）。一方，オランダ語では，オ komen「来る」/gaan「行く」/varen「（船で）行く」

[6] ドイツ語文法では，語彙的アスペクトを「動作態様」（ド Aktionsart）と呼ぶことがある。ただし，注 3 で述べたように，動作態様には使役動詞も含まれる。

はもっぱら zijn（ド sein）-支配だが，オ reizen「旅行する」は hebben（ド haben）-支配と zijn-支配が可能であり，オ dansen「踊る」/roeien「漕ぐ」は hebben-支配だけである。場所の移動を表す場合でも，運動の手段や習慣・反復などで出来事自体に焦点が置かれると，変化の意味が薄れて hebben-支配も可能になる（Honselaar 1987: 57f.）。

(51) オ Jan ***is/heeft*** naar Groningen ***geWANdeld*** (niet ***geFIETST***). ヤン（男名）はフローニンゲンへ（naar Groningen）歩いて行った（heeft～geWANdeld←wandelen, 大文字は強調による強勢音節）（自転車で行った（niet geFIETST←fietsen）のではない（niet））
（Broekhuis/Corver/Vos 2015: 210）

これに対して，状態の変化の意味では，次例のようにドイツ語は sein-支配に鈍感な傾向があり，オランダ語のほうが zijn-支配に敏感である。

(52) ド haben-支配：zunehmen 増える，強まる　abnehmen 減る，弱まる　beginnen/anfangen 始まる，始める（mit ～を）　enden 終わる/stoppen 停止する　promovieren 博士の学位を取る　gefallen ～の気に入る
オ zijn-支配：toenemen/afnemen/beginnen (met)/eindigen/stoppen/promoveren/bevallen（意味は同上）

ほかにも，たとえばオ bloeden「出血する」は，もっぱら haben-支配のド bluten「同左」と違って，オ Jan ***heeft*** hevig ***gebloed***.「ヤン（男名）はひどく（hevig）出血した」↔Jan ***is*** dood ***gebloed***.「ヤンは出血死した（dood, ド tot/英 dead）」のように，意味に応じて使い分ける（Broekhuis/Corver 2015: 953）。

これは単なる偶然だろうか。一般に sein-/zijn-支配の自動詞は非対格動詞，haben-/hebben-支配の自動詞は非能格動詞とされる。①ド Das Schiff ***ist***

gesunken.「船が沈んだ」(←sinken 沈む，自動詞・非対格動詞）の主語 das Schiff「船」は，②ド Man ***hat*** das Schiff ***gesenkt***.「船を沈めた」(←senken 沈める，他動詞）の目的語に対応する。①では対格となり得ず，「非対格」の主格で現れるので，「非対格動詞」と称するわけである。過去分詞では① das ***gesunkene*** Schiff「沈んだ船」↔② das ***gesenkte*** Schiff「沈められた船」と対応する。

ところが，(52)の動詞は完了の助動詞の選択に応じて，過去分詞による名詞修飾の可否が異なることがある。ド zunehmen/オ toenemen「強まる」，ド anfangen/オ beginnen「始まる」を例に取ろう。これは語彙的意味とは別のレベルで構造的な相異があり，その反映と解釈される。

(53) ド Die Kälte ***hat*** plötzlich ***zugenommen***. 寒さは突然，強まった
↔*die plötzlich ***zugenommene*** Kälte 突然，強まった寒さ
(Ten Cate et al. 2013[2]: 142)

(54) オ De kou ***is*** plotseling ***toegenomen***. 同上
↔de plotseling ***toegenomen*** kou 同上 (ib. 142)

(55) ド Die Sitzung ***hat*** gerade ***angefangen***. 会議はちょうど始まった
↔*die gerade ***angefangene*** Sitzung ちょうど始まった会議(ib. 142)

(56) オ De vergadering ***is*** net ***begonnen***.
↔de net ***begonnen*** vergadering 同上 (ib. 142)

8-4 非現実を表す完了形と完了の助動詞

最後に，オランダ語と西フリジア語の風変わりな完了の助動詞の選択について言及しておこう。

まず，非現実の意味では，オ zijn/西フ wêze-支配の自動詞がオ hebben/西フ ha(wwe)-支配になることがある。両言語ともに接続法（仮定法）は失われており，非現実の意味は過去形で表す。

(57) 西フ As ik net moatten hie, ***hie*** 'k hjir net ***komd***. 必要がなかった（ik

net moatten hie）ならば（as），私は（ik）ここには（hjir）来なかっただろう（hie 過去形～net komd←hawwe, komme 来る：wêze-支配）

（58） 西フ Jo ***hiene*** leaver thús ***bleaun***. あなたは（jo）むしろ（leaver）家に（thús）とどまっていたほうが良かったのに（hiene 過去形～bleaun ←hawwe, bliuwe とどまる：wêze-支配） （Bangma 1993[2]: 136）

（59） 西フ Klaas ***moast*** mar ***meikomd ha***. クラース（男名）はいっしょに来る（meikomd ha 完了不定詞←meikomme いっしょに来る：wêze-支配）べきだったのに（moast 過去形←moatte）なあ（mar）
（Hoekstra 1997: 55）

オランダ語では意味の相異があり，話者によって判定の揺れもあるが，zijn-支配はもともと不可能だった出来事，hebben-支配は可能だったかもしれない出来事を表す傾向がある。(57)は本来，zijn-支配の動詞の完了形の例だが，通常の zijn-支配による was～geweest は遠い過去の出来事を述べ，was～gebleven は当時，別のことをしていたのを悔やむのに対して，例外的な hebben-支配による had～geweest は都合が悪かったことを暗示し，had～gebleven は残らない決心をしたのを悔やむといった違いがあるとされている（Honselaar 1987: 65f., 清水 2003: 491）。

（60） オ ***Was/Had*** ik er maar bij ***geweest/gebleven***. 私が（ik）その場に（er～bij）｛いれば良かったのに（was/had 過去形～geweest←zijn いる：zijn-支配）/とどまっていれば良かったのに（was/had 過去形～gebleven←blijven とどまる：zijn-支配）｝なあ（maar）
（Honselaar 1987: 65）

さらに，オランダ語では，「zijn-支配の自動詞＋話法の助動詞」の完了形に，完了の助動詞に hebben と並んで zijn を用いることがよくある。話法の助動詞はドイツ語と同じく hebben-支配なので，zijn-支配は変則的である。オ

heeft kunnen（＝代替不定詞）gebeuren は kunnen「あり得る」に力点を置いて「起こることがあり得た」，オ is kunnen gebeuren では gebeuren「起こる」に力点を置いて「実際にあり得ることが起こった」という相異があるとされる（Honselaar 1987: 65）。

（61） オ Dat zoiets ***heeft/is kunnen gebeuren***. そんなことが（zoiets）起こり得た（heeft/is kunnen（＝代替不定詞）gebeuren）なんて（dat 従属接続詞，ド dass） （Honselaar 1987: 65）

参考文献

朝尾幸次郎（2021）『英語の歴史から考える英文法の「なぜ」2』大修館書店

Bangma, Jelle（1993[2]）*Wolkom! Kursus Frysk ferstean en lêzen*. Ljouwert: Afûk.

Baur, Arthur（1997[11]）*Schwyzertüütsch*. Winterthur: Gemsberg.

Behaghel, Otto（1928）*Deutsche Syntax. Bd. 3*. Heidelberg: Winter.

Braun, Josy/Johanns-Schlechter, Marianne/Kauffmann-Frantz, Josée/Losch, Henri/Magnette-Barthel, Geneviève（2005）*Les verbes luxembourgeois*. Luxembourg: Ministère de l'Éducation nationale et de la Formation professionnelle.

Bremmer, Rolf H, Jr.（2009）*An Introduction to Old Frisian*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.

Broekhuis, Hans/Corver, Norbert/Vos, Riet（2015）*Syntax of Dutch. Verbs and Verb Phrases. Vol.* 1. Amsterdam: Amsterdam University Press.

Broekhuis, Hans/Corver, Norbert（2015）*Syntax of Dutch. Verbs and Verb Phrases. Vol.* 2. Amsterdam: Amsterdam University Press.

Bußmann, Hadumod（2008[4]）*Lexikon der Sprachwissenschaft*. Stuttgart: Kröner.

Collinder, Björn（1974）*Svensk språklära*. Lund: Gleerup Bokförlag.

Comrie, Bernard（1976）*Aspect*. Cambridge/New York/Melbourne: Cambridge University Press.

Den Besten, Hans（1989）*Studies in West Germanic Syntax*. Amsterdam/Atlanta, GA: Rodopi.

Der Begriff Tempus. Eine Ansichtssache?（1969）*Beihefte zur Zeitschrift „Wirkendes Wort" 20*. Düsseldorf: Schwann.

Donaldson, Bruce C.（1993）*A Grammar of Afrikaans*. Berlin/New York: Mouton de

Gruyter.
Ebert, Robert Peter（1978）*Historische Syntax des Deutschen*. Stuttgart: Metzler.
Eroms, Hans-Werner（2009）Doppelperfekt und Doppelplusquamperfekt. In: Hentschel, Elke/Vogel, Petra（Hrsg.）*Deutsche Morphologie*. Berlin/New York: De Gruyter. 72–92.
Faarlund, Jan Terje（2019）*The Syntax of Mainland Scandinavian*. Oxford: Oxford University Press.
Filppula, Markku（1999）*The Grammar of Irish English*. London/New York: Routledge.
Fischer-Dieskau, Dietrich（ed.）（1995）*The Fischer-Dieskau Book of Lieder*. New York: Limelight Editions.
Fleischer, Jürg/Schallert, Oliver（2011）*Historische Syntax des Deuschen*. Tübingen: Narr.
Hilpert, Martin（2008）*Germanic Future Constructions*. Amsterdam/Philadelphia: Benmajins.
Hodler, Werner（1969）*Berndeutsche Syntax*. Bern: Francke.
Hoekstra, Jarich（1997）*The Syntax of Infinitives in Frisian*. Ljouwert: Fryske Akademy.
Honselaar, Wim（1997）Zijn vs. Hebben in het samengesteld perfectum. *De Nieuwe Taalgids* 80. 55–68.
Jespersen, Otto 1972（1933）*Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin Ltd.
Kluge, Wolfhard（1969）Zur Diskussion um das Tempussystem. In: *Der Begriff Tempus. Eine Ansichtssache?* 59–68.
König, Werner（1998[12]）*dtv-Atlas Deutsche Sprache*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
高津春繁（1968）『ギリシャ語文法』岩波書店
Kress, Bruno（1982）*Isländische Grammatik*. Leipzig/München: VEB Verlag Enzyklopädie/Hueber.
Lass, Roger（1990）How to Do Things with Junk. Exaptation in Language Evolution. *Journal of Linguistics* 26: 79–102.
Latzel, Sigbert（1977）*Die deutschen Tempora Perfekt und Präteritum*. München: Hueber.
Lockwood, W. B.（1968）*Historical German Syntax*. Oxford: Clarendon Press.
Marti, Werner（1985）*Berndeutsch-Grammatik für die heutige Mundart zwischen Thun und Jura*. Bern: Francke.
Meijering, H. D.（1980）d(e)-Deletion in the Past Tense of the Class II Weak Verbs in Old Frisian. In: Van Alkemade, D.J./Feitsma, A./Meys, W.J./Van Reenen, P./Spa, J.J.(eds.) *Linguistic Studies Offered to Berthe Siertsema*. Amsterdam: Rodopi. 277–286.
Neijmann, Daisy L.(2022) *Icelandic. An Essential Grammar*. London/New York: Routledge.

Paul, Hermann（2002[10]）*Deutsches Wörterbuch*. Tübingen: Niemeyer.

Ponelis, F. A.（1979）*Afrikaanse sintaksis*. Pretoria: Van Schaik.

Schanen, François/Zimmer, Jacqui（2012）*Lëtzebuergesch Grammaire luxembourgeoise*. Esch-sur-Alzette: Eidtions Schortgen.

千石　喬（1983）「文構造記述のための文成分分類―特集にあたって」『ドイツ文学』（日本独文学会）71．1–13.

清水　誠（2003）『西フリジア語文法―現代北海ゲルマン語の体系的構造記述とゲルマン語類型論構築のための基礎的研究』（論文博士学位請求論文）北海道大学

清水　誠（2006）『西フリジア語文法―現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』北海道大学出版会

清水　誠（2012）『ゲルマン語入門』三省堂

清水　誠（2019）「ドイツ語から見たゲルマン語―名詞の性，格の階層と文法関係」『北海道大学文学研究院紀要』158．37–76.

清水　誠（2020）「ドイツ語から見たゲルマン語（2）―属格と所有表現」『北海道大学文学研究院紀要』160．37–96.

清水　誠（2021a）「ドイツ語から見たゲルマン語（3）―名詞の性の発達と複数形の形成」『北海道大学文学研究院紀要』162．35–101.

清水　誠（2021b）「ドイツ語から見たゲルマン語（4）―冠詞と指示詞」『北海道大学文学研究院紀要』163．1–22.

清水　誠（2021c）「ドイツ語から見たゲルマン語（5）―人称代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』164．19–41.

清水　誠（2021d）「ドイツ語から見たゲルマン語（6）―３人称代名詞，再帰代名詞，所有代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』165．31–60.

清水　誠（2022a）「ドイツ語から見たゲルマン語（7）―２人称代名詞と関連表現」『北海道大学文学研究院紀要』166．1–27.

清水　誠（2022b）「ドイツ語から見たゲルマン語（8）―不定詞と分詞」『北海道大学文学研究院紀要』167．1–30.

清水　誠（2022c）「ドイツ語から見たゲルマン語（9）―動詞の強変化と弱変化，ウムラウト，人称語尾」『北海道大学文学研究院紀要』168．1–35.

清水　誠（2023）「ドイツ語から見たゲルマン語（10）―強変化動詞，過去現在動詞，母音交替」『北海道大学文学研究院紀要』168．1–39.

Siemund, Peter（2013）*Varieties of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Stellmacher, Dieter（1983）Phonologie und Morphologie. In: Cordes, Gerhard/Möhn, Dieter（Hrsg.）*Handbuch zur niederdeutschen Sprach- und Literaturwissenschaften*. Berlin: Schmidt. 238–278.

Szczepaniak, Renata（2011[2]）*Grammatikalisierung im Deutschen*. Tübingen: Narr Francke

Attempto.

Ten Cate, Abraham P./Lodder, Hans G./Kootte, André（2013²）*Deutsche Grammatik. Eine kontrastiv deutsch-niederländische Beschreibung für den Zweitsprachenerwerb*. Bussum: Coutinho.

Thráinsson, Höskuldur/Petersen, Hjalmar P./Jacobsen, Jógvan í Lon/Hansen, Zakaris Svabo（2004）*Faroese*. Tórshavn: Føroya Fróðskaparfelag.

Weinrich, Harald（1971²（1964））*Tempus. Besprochene und erzählte Welt*. Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz: Kohlhammer.（ヴァインリヒ，ハラルト（脇阪　豊/大瀧敏夫/竹島俊之/原野　昇 訳）（1982）『時制論―文学テクストの分析』紀伊國屋書店）

Wellander, Erik（1973⁴）*Ritktig svenska*. Stockholm: Esselte Studium.

Werner, Otmar（1993）Schwache Verben ohne Dental-Suffix im Friesischen, Färöischen und im Nynorsk. In: Schmidt-Radefeldt/Harder, Andreas（Hrsg.）*Sprachwandel und Sprachgeschichte. Festschrift für Helmut Lüdtke zum 65. Geburtstag*. Tübingen: Narr.

Wessén, Elias（1965）*Svensk språkhistoria. III*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.

Wessén, Elias（1968⁹）*De nordiska språken*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.（ヴェセーン，エリアス（菅原邦城 訳）（1988）『新版　北欧の言語』東海大学出版会）